



卓 話



留学生の集い

留学生の集いは、次の留学生の出席のもと、秋葉賢米山奨学委員会委員長の司会進行で行われました。

地区米山奨学委員会委員長の神津和男氏（東久留米RC）も参加されました。



参加者（敬称略）

- 岡見 さえ（東京四谷RC・ロータリー財団奨学生
1999～2000年フランス）
山内 裕喜（東京四谷RC・青少年交換留学生
2001～2002年アメリカ）
佐藤 伸昭（ROTEX・ジュニアカウンセラー長
2003～2004年ドイツ）
梁 一強（東京四谷RC・米山奨学会奨学生
1999～2001年中国）
関 士（東京四谷RC・米山奨学会奨学生
2003～2004年中国）
鄭 基淑（東京四谷RC・ロータリー財団奨学生
2004～2005年韓国）
朱 大勇（東京四谷RC・米山奨学会奨学生
2004～2006年中国）
Victoria MacCready
（東京御茶の水RC・ロータリー財団奨学生
2004～2005年アメリカ）
Dorothee Woitke（東京四谷RC・青少年交換学生
2005～2006年ドイツ）

参加者の発言要旨は、次のとおりです。

自己紹介

岡見：フランスのトゥールーズに1999～2000年の1年間留学していました。専門は文学で、上智大学で今も研究を続け、現在博士論文の準備中です。

山内：2001～2002年にアメリカに留学していました。英語の勉強をしたいと思い、留学先は最終的に希望したアメリカに決まりましたが、幸運と考えるのではなく、1つの選択がなされたという

考えで留学をしてきました。

現在、上智大学経済学部3年生です。

佐藤：2003～2004年にドイツに留学しました。山内君と同じで、希望は出しても採用されるとは限りませんので、どこでもいざという気だったんですが、ドイツと聞いたときは嬉しかったです。ドイツに行って1年間楽しく過ごせて帰りました。現在、慶應義塾大学総合政策学部で国際関係を勉強しています。

関：来日したのは2000年ですが、2003～2004年の1年間、四谷RCにお世話になり、無事修士を卒業することができました。

現在、博士課程で研究を続けています。

鄭：国際ロータリー親善奨学生として2004～2005年に来日しました。高校生のときから日本に興味を持ち、大学では日本の経済と政治・アジアを中心とした国際関係を勉強しましたが、現在は、上智大学大学院で国際関係や日本のODAの勉強をしています。

朱：6年前に中国から来日して、最初の2年間は日本語学校に通い、その後東京大学科学研究所に入って、昨年4月からロータリー奨学生となって2年目です。

ピクリア：アメリカから留学してきて、上智大学で日本語と国際ビジネスを勉強しています。高校生のときから4ヶ月程関西外語大学で日本語を勉強し、静岡で3年間英語教師をしていました。ロータリーの奨学金を希望したのは、ロータリーのボランティア活動のイメージが強く、他の奨学金より意味があると思ったからです。現在、部活でボランティア活動をしています。

派遣先の印象で良かったこと

岡見：フランスのトゥールーズは、初めての町でしたが、ロータリーの方が駅まで迎えに来てくださり、とても安心すると同時に嬉しかったことを覚えています。それ以後の思い出も良いものばかりです。

佐藤：小さな田舎町であったということもあり、人々が優しく、1年間出会いの連続でした。世界中に自分の人生にとってかけがえのない人々を得ることができました。

梁 : 治安がよく、環境が清潔、人間が親切、丁寧、サービスがよいと思います。

鄭 : 私は、地元のロータリーや他のロータリークラブの例会に参加する機会がたくさんありましたが、四谷RCが一番明るい感じがしました。他のRCは、男の方が殆どです。四谷RCは、女性会員の役割が目立ち、それで明るい雰囲気ではないかと思っています。

朱 : 日本に来て、印象の良かったことはたくさんあります。日本の方々は、みんなきちんと社会秩序や公のルールを守ることを実感しています。中国と違って、日本の公共機関、役所や銀行、病院などのサービスはとてもいいですね。職員の接客の態度も良く、しかもすべてのサービスは行き届いています。

クワア: 日本は素晴らしいところです。人々は優しく、鉄道システムは印象的です。

派遣先の印象で悪かったこと

岡見 : 大学の設備の悪さ(国立で予算も少ないので、仕方ないですが)です。

佐藤 : 特に高い水準の教育を受けられていない人たちに見られる外国人への差別。他の留学生と話をすると、ドイツはだいぶましというのが現状のようです。

梁 : 周りの社会と人間との本当の接触が難しい点です。

関 : 安定した住まい探しが難しすぎます。

朱 : 物価は高いこと。「何でも高い!」というのが、日本に来て最初の印象です。値段を見る度にすぐ頭の中で中国の元でいくらになるかを計算して、いつも「うわ~高いな~」と思っていました。特に、民間のアパートを借りると、いっぺん20、30万円ぐらいが必要ですので、留学生にとって、払えないぐらいの大金といえます。

気になった点

梁 : ルールがありすぎて、最初は苦労しましたが、ルールに慣れ、守っておけば外れがありませんでした(衣、食、住、行)。

関 : 大学まで出た若者が就職しないこと。

朱 : 地震が多いこと。日本は地震が多い国です。去年の新潟の地震、東京でも大きく揺れましたが、地震の体験は少ないので、本当にびっくりしました。東京でこんなに揺れていたから、新潟の人たちの驚きは想像もつきません。立っていることもできない震度7はどんなものなのか考えられません。

苦労したこと

岡見 : 銀行、滞在許可証など他の生活上必要な手続は、ロータリーの方々のサポートでスムーズでしたが、大学の登録手続は自分でやるしかなく、行った当初はまだ友達もいませんので、いろいろと

苦労が多かったと思います。

佐藤 : やりたいことが多すぎて何を先に自分がすべきなのか判断ができなくなったときに、自分自身の管理能力のなさを痛感しました。

梁 : お金がない、住宅賃貸、都内での車を維持、文化、言葉などいろいろです。

関 : 部屋探しなど沢山あるけど、タクシーの運転手さんに振り回され、料金を沢山払わされ、目的地に行けなく、一日が台無しになったことです。

朱 : 最初半年ぐらいは、言葉があまり通じず、生活は大変でした。私費留学生として日本に来た2年間、日本語学校に通いながらアルバイトをやっていましたが、とても忙しく、辛かったです。

異文化に接したときの印象

岡見 : 非常にバランス感覚の優れた国だと感じています。異なる文化、異なる考えも柔軟に受け入れたり、理解しようとする態度を尊敬しています。

佐藤 : 1年間過ごした自分にとって第二の母国であり、常に戻りたい、住みたいと考えさせられてしまう場所です。

梁 : 日本は非常に発達していた国です。社会全体的の教育レベルも高いです。国民は決まったルールに守って行動していて、管理をしやすい国ではないかと感じました。豊富なマーケットのため、各自が好きな生活スタイルをしています。留学先の日本は文化的に中国と近く、気候などからも大変住みやすい(地震と台風以外のとき)国だと思っています。日本の文化、特に古代文化、文学はとても素晴らしいと思います。しかし、日本の若者文化をはじめとする近現代の思想などには理解できないところを多く感じています。

鄭 : 観光に来たときとは気持ちが随分違いました。日本来た当初、毎日のように学校へ行く途中や帰る途中で変な男のナンパや、電車の痴漢など、身元の安全が脅威されたり、本当に怖かったです。20年間以上、儒教の国で育って来た私には、色々なことがショックでした。正直いって、日本の初印象は良いものではありませんでした。

今は日本の定食が一番好きというくらい、すっかり日本の生活になれました。日本という国は不思議ほど、様々な文化が混在し、日本の文化と微妙にバランスを取っている感じがしました。しかしながら残念なことに、若者を見ると、言葉が汚く、礼儀も正しくなく、外国人が考える日本や日本人のイメージがだんだんなくなっている気がします。

朱 : 日本に来た当初、日本人が交通ルールをよく守ることに気づきました。東京はどこでもきれいな

ですが、これは一人一人が公共衛生に気を使って、ゴミは細かく分別され、リサイクルが進み、ゴミも資源化されることによるでしょう。それに、日本のみんなが日本の伝統的なことを大事に守っています。昔からの行事や文芸や習慣はいまでも守られ、行われています。一方、渋谷で濃い化粧（渋谷ガールで）をして、自分の将来や社会のことについて全然考えていない若者が増えてきたことに目がつき始めました。このような若者に対してどういう対処を取っていいか、みなさんで一緒に考えるべきです。

自国または派遣先国と日本との学生生活の違い

岡見：学費や生活費は日本より安いけれども、親がかりの学生はほとんどいませんので、勉強や遊びなど生活のあらゆる部分において日本の学生よりしっかりしているように感じました。「なんとなく」や「みんながそうだから」という理由で行動する人をまったく見かけませんでした。

佐藤：勉強に対する姿勢の違いを感じます。勉強をさせられている感じの日本に対して、勉強をして知識を身につけたいというのが一緒にの教室にいても伝わってきます。

梁：祖国では知識の勉強に専念していましたが、留学先では、知識の勉強+社会の勉強+アルバイトでした。

関：中国では、時間を自由自在に使うことができました。授業料を払ってから、自分が行う手続はほとんどありませんでした。日本では、勉強以外のことで時間が取られることが多すぎます。

鄭：韓国の大学は、キャンパスが広くて逆に大変だったのですが、日本の東京の大学はキャンパスが狭いのが印象的だったのです。また仲間意識とかが少ないように見えました。同級生たちは皆、私のことを気使ってくれて、同級生たちとは仲が良く、学生生活は全然問題がないと思います。正直にいうと、日本の大学生は全然勉強していない気がしました。というのは、韓国は就職のために英語やコンピュータなどの資格試験のために一年生から勉強しますが、日本の大学の場合、試験も少なく、評価も甘いと思いました。



朱：日本の大学は中国の大学より部活が盛んです。放課後や休みの日にも、学生さんがよく集まっているんな部活を楽しんでいます。中国では、部活より、同級生達が集まって一緒に遊ぶことが多いです。

ピクリア：すべてが違います。

友人関係について

岡見：文学の博士前期課程にいたため周りは中高や大学の教員を目指す人が多く、私の勉強も熱心 handed 手伝ってくれる人が多くいて、とてもありがたかったです。今でも情報交換を続けていて、多くのことを教えられたり教えたりする交流が続いています。

佐藤：部活活動がない代わりに、地元密着型のコミュニティが多く、学校よりも地元の友達が増えそうですが、実際は、小さな街だったせい、学校の友達=地元の友達でした。

梁：祖国では親友になれますが、留学先では友たち関係で距離をおいての付き合いです。

関：日本にきて日本人の友達が沢山できました。勉強のことで困っている時や生活のことで悩んでいる時などはいつも相談に乗ってくれました。月一回友人達との例会もあり、彼女たちとの付き合いは日本での留学生活で欠かせないことです。

朱：日本の学生と授業や部活を通じて仲良くなりませす。中国では部活が少ないですが、大学生たちはほとんど大学の寮に住んでいて、集団生活を送っていますので、日本の学生達よりは深い付き合いをしているかもしれないと思います。

ピクリア：日本の学生は外国の文化に非常に興味があり、そのお陰で友たちを作りやすかった。

学生生活の違い

岡見：言葉のハンデがある上、授業数、論文の規定など、学位取得の条件が日本よりずっと厳しかったので、勉強づけの毎日でした。

佐藤：学校は朝の8時前に始まり、午後1時前には終わって、昼食は家族そろって家で食べます。学校で軽食を食べる場合もありました。

梁：祖国では単純、留学先では複雑です。

関：留学生という言葉のとおり、普通の学生生活ではないことが昔の学生生活と今の留學生生活の違いだと思います。今は、勉強だけではなく、外国での生活全般を一人で担わなければなりません。

朱：日本では、高校、大学で先輩、後輩の身分の差別を意識しなければならないし、後輩は、先輩に対して敬語を使います。中国では、先輩、後輩の関係よりは友だちのように親しく付き合うのが一般的です。

ピクリア：日本の学生はより多くの自由時間があるように思われます。

留学したことによるメリット

岡見：ディプロマを取得することができたこと。そのまま同じ指導教官の下で、博士課程に進学する道が開けたこと。上智大学とトゥールーズ大学との交流が深まったことなどです。

佐藤：何よりも多くのかけがえのない人々との出会い

国際社会を見る際に確実に留学前よりも広い視野を持てるようになりました。

梁：メリットのことなどはあまり考えていませんが、海外での生活経験は自分の人生の中に充実ができたと考えています。

関：長期留学することで外国にいる人々の気持が分かるようになった。中国に帰って、困っている外国人を見かけたら必ずなんらかの形で助けと思う。学問的に沢山のことが勉強できた。

鄭：留学する前と現在の私を比べて見るとはるかに違います。デメリットは一つもなかったと思うぐらい、日本の留学を通じて韓国では得られない機会をたくさん得られました。もちろん外国人としていろいろ心の苦しみもあったのですが、今はそういう壁をある程度乗り越え、苦しみがあるからこそ頑張れると思っています。

視野を広げる

韓国で学んできたことが井戸の中の蛙のように狭かったことがわかり、一断面しか見られなかったことが、日本の留学を通じて総合的そして多面的に理解することができたと思います。

ネットワークを広げる

留学を通じて色々な方々に会え、ネットワークが2倍・3倍広げられました。こういうネットワークは将来、私の大事な財産になると思います。

日本の国会で政治を学ぶ

去年から参議院でインターンをしながら、本当の政治を学ぶことができました。

国連大学での専門家養成コースに参加する国連で働くのは私の夢の一つです。国連大学で集中コースを受けることは大切な経験になると思います。

本当の日本をわかる

私は日本に来て、日本の言葉や文化がわかり、楽しみが増えました。

朱：日本では、いろいろ体験し、勉強し、とても充実した留学生活を送っています。今は、どんなことが起こっても自分で解決しなければなりません。これで、本当の意味での自立ができ、これも留学の意義だと思っています。

日本に来て、いろんな国からの留学生達に出会って、交流会、研修旅行などのいろんな活動を通して、言語、文化、宗教などの壁を越え、他の国の奨学生たちと仲良く、相互理解を深めてきました。

Victoria: 毎日、自分自身で何か新しい物を見たり、学んだりできることです。

留学したことによるデメリット

佐藤：留年することによって高校の学年が一つ下がってしまったこと。しかしわかっていたことであ

り、それが本当にいやなのならば留学をする必要性がないと思います。

関：中国での社会勉強ができなかったこと。家族や友達との楽しむ時間を失ったことです。

朱：日本の大学院に入った当初、日本語力が足りず授業や研究についていくのが大変でした。日本語が第一言語でない以上、ネイティブの学生の数倍の努力が必要だと考えています。日本に長く暮らしているうち、日本の文化や日本人の考えを受け入れることが多い一方、中国の振り舞いや考え方を十分理解できないことがあります。将来、中国に帰るときに、この部分の切り替えができないのは留学のデメリットです。

祖国で持っていた目標と派遣先での目標の違い、また派遣後の目標の違い

岡見：派遣前の目標（トゥールーズでのディプロマの取得と、上智大学修士修了および博士課程進学）は、どちらも果たすことができました。また、派遣中にトゥールーズと上智大学との共同指導の話が持ち上がり、派遣後はその交流を推進するという目標が新たに生まれました。

佐藤：日本では、留学先で将来自分が進むべきをある程度見つけて帰国したいと考えていました。でも、留学先では、一日一日を必死に頑張って毎日一日が終わってベッドに入ったときに「今日も色々な経験をしていい一日だった」と思えるような心がけていました。何もやり残したくなかったからです。

梁：祖国では、中日両国の橋になれる仕事に貢献したいと考えていて、ある意味では中国にいた頃は少し実現していた感じがありましたが、留学先では、その可能性が薄くなってきました。現在一般人としての自分の研究分野で少しでも成果が出れば人類の健康には役に立つではないかと思って頑張っています。

関：中国でもっていた目標と今の目標は変わっていません。

鄭：目標は変わっていません。私は研究者を目指しています。しがしながら、研究者になる前に国連などでいろいろ実務的なことも経験したいと思っています。

朱：私は、日本に来る前に、中国の病院で勤務していました。そのとき、エイズの外来の患者急速に増えていると実感しました。そこで、エイズという感染症への興味がわき、エイズ研究をしたいと思い始めました。同時に、中国と日本や欧米のエイズの研究のレベルの差を感じましたので、日本への留学を決心しました。今までの目標はもちろん変わっていません。その上、日本の方々や各国の留学生と接している

うちに、新しい目標を見つけました。日本で留学し、日本のことについてよく理解していると思います。日本の本当の姿を私の祖国の人々に伝えることが自分の責任であると考えようになりました。

異国へ住んでみたい気持・動機や祖国へ帰りたい

気持とその理由

岡見：現在に至るまで、フランスに永住したいという気持をもったことはありません。過去3回の留学はいつも奨学金を受けていましたので、自分の留学経験を日本でより多くの人たちに還元したいという気持が強く、フランスにいるときも、日本に帰ってどのようにフランスでの経験を役立てることができるかを考えて生活していました。

佐藤：「今までの日本人としての生活から若いうちに飛び出してみたい！」と漠然と思って試験を受けたのが志望動機でした。ホームシックには1年を通してかからなくて、日本側の知合いにブーイングを受けました。よく「日本に帰るのがいやでいやでたまらなかった」という意見を聞きますが、僕は日本に帰ることに對してはいやな気持は全く起きず、むしろ楽しみにしていました。ただ、帰国時にドイツを出るとき辛すぎただけでした。

梁：住んでもよいと思う気持は50%、その理由は生活に慣れたことと生活の必要性が増えたことです。帰りたい気持は50～70%、理由は祖国だからです。

関：異国に住んでみたい気持は60%。その理由は、日本で長期留学した経験から文化、言葉など違う国に住むといろいろな意味で楽しみが沢山あるライフスタイルだと感じているからです。人間的に強くなれると思います。中国に帰りたい気持は40%。理由はとても簡単で、自分の故郷だからです。故郷ではリラックスできます。人間は最後には生まれたところに帰るものだと思っています。

鄭：私は異国に住みたくありません。私の家族が住んでいる韓国へなるべく早く戻りたいのです。今は私の将来、私の目標のために我慢していますが、最終的には韓国へ戻って、研究者として専門家として日韓関係に貢献したいと思います。

朱：私は、博士卒業後、自分のスキルをアップさせるために、引き続き、日本の大学・研究所で数年間をかけ、エイズ研究を続けるつもりです。将来、中国に戻り、日本で学んだ知識や技術などを活かして、中国の人々のために役だつことができたらと思います。それに、日中のあらゆる面の交流について、架け橋役として、力を尽くしたいと考えています。

ビクトリア：私は、いつも外国の文化に興味がありますから、日本の文化に浸りきることができたらと期待していました。ただ、時には自分の国に帰りたとも思います。何故なら、母国での色々なことを失っているかもしれないからです。今は、日本での生活を本当に楽しんでます。

ボランティア活動のやり方(あなたにできることは?)

岡見：日本に留学している奨学生およびこれから派遣される奨学生のサポートです。

梁：祖国の言葉を教える、祖国の文化を紹介する、祖国に出資した会社の相談役などです。

関：実際ボランティアに参加したことはありませんので、何ができるかはっきりいえません。費用がかからないこと、事務的なことはできそうな気がします。

朱：私にできることといえば、たとえば、中国の社会や文化などに興味を持っている方々、あるいは中国に進出したい会社側に、中国のあらゆる面について情報を提供したり、中国のことを紹介したりすることができると思っています。必要であれば、中国語を教えることも可能です。

ビクトリア：日本ではボランティアで多くの機会があると思います。私の大学には、孤児院へ行き子供たちの家庭教師として活動するクラブがあり、自分も積極的に参加しました。また毎日の生活の中で何らかのボランティア活動ができる可能性があると思います。私自身、英語を本当に勉強したいけれども、英語学校が高くて行く余裕がない多くの若人に逢いました。そんな彼らとしばしば語学交換を一緒にします。この秋には、高校生のための英語キャンプを企画しているグループに参加します。インターネットをみれば、食料援助を行っている「セコンド・ハーベスト・ジャパン」のような組織が数多くあります。ボランティア活動の最も重要な点は、自分の持っているスキルをよく考えて、他人を助けるためにその能力を使うことだと思います。

例会へ出席するとき何を楽しみに来ますか

関：卓話を聞くこと、会員たちのお話を聞くことができるのを楽しみにしています。なぜかという、数多くの困難を乗り越えて成功した方のお話を聞くのは大変勉強になるし、これからの自分の人生にプラスになると思っているからです。

朱：いろんな方々との交流ができることは一番魅力的だと考えています。財団の方々がいつも優しく声をかけてくださって、日本の政治や伝統・文化についていろいろ話すことができ、大変勉強になりました。それに、卓話を通じて、色んな分野や専門の方の話聞くことができ、自分の専門以外の知識もたくさん勉強ができました。

私には、中国の社会や文化などに興味を持っている方々、中国に進出したい会社側に中国のあらゆる面について情報を提供したり、中国のことを紹介したりすることができると思います。また、中国語を教えることも可能です。

ビクトリア: 例会に参加することで、日本の文化・日本の言葉を学び、ロータリアンとの素敵な会話を楽しむことができます。

会員との接し方・会員と接してうれしかったことなど

鄭 : 会員の方々のご親切で、声をかけてくださり、お気を使って下さって本当に感謝しています。

梁 : ロータリアンの事業への見学と短期実習に行きたいと思います。

岡見 : 嬉しかったことは、とても親身になって私の夢を応援して下さったことです。家族の方も列席される例会では、会員の奥様方にもとてもやさしくしていただいたことが思い出に残っています。

関 : 普通の留学生として接してくれたときは嬉しかったです。悲しかったことは特にありませんが、会員のお話の意味を正しく理解できているかどうか自分が判断できないとき、どのように返事すればいいのかわからなくて困ったときがありました。

朱 : 嬉しかったことといえば、やはりいろんな方と接することができ、学校で触れられないことにもたくさん知って、視野を広げたことです。それで将来は研究の交流に限らず、あらゆる面で日中の架け橋になりたいと考え始めました。

奨学金のあり方

岡見 : ロータリアンの奨学金は、非常に重要かつ意義深いものだと思います。なぜかという、私のように「フランス文学」、つまり英語圏以外の国に関する学問、そして、理数分野や経済、法学など明らかに生活の役にたつのではない学問を志す者にとって、奨学金を得て研究を続けることは非常に難しいからです。フランス文学に関していえば、ロータリー以外の奨学金は、フランス政府の奨学金以外にないのが現状ですが、この奨学金の試験は非常な難関で、合格者のほとんどはすでに数年のフランス生活を経ている者が大半です。そしてその人たちのほとんどが、ロータリアンの奨学金を受けた人たちなのです。現在私の所属する大学の教授方も、ほとんどがそのような道を辿って現在に至っています。

佐藤 : ロータリークラブの奨学金(留学)プログラムについて思うのは、その充実した内容に対して知名度が低いこと。団体の性格上、積極的な広報活動はできないのかもしれませんが、将来、世界平和、または日本を支えていく人材を支援

するという目的に近づくためには、もっと多くの人の耳に、この有益な情報が入ったほうがよりよいものになると思います。

朱 : 奨学金のあり方はいいと思っています。ロータリー財団の奨学生として、毎月例会に参加し、職業、年齢、人生観や価値観が異なる会員の方々といろいろ話し合うことによって、学校で勉強できない知識をたくさん知ることができます。また、会員の方々と交流しているうちに、自分の視野を広げ、国際感覚も徐々に身につけてきました。

ビクトリア: 奨学金の規定はルーズではないでしょうか。自由であることは良いことだと思いますが、たまには、もう少しロータリーからの方向づけとか、指導力があってもよいと思います。

国際貢献への思い

岡見 : 余裕ができれば、ロータリアンの国際貢献のお手伝いもしてみたいと思っていますし、勝手な思いこみかもしれませんが、自分の研究を深めていくことで、フランスと日本の文化の橋渡しをすることができればこの上のない喜びだと考えています。

僕が留学中感じたのは世界中に蔓延している「偏見ウイルス」の恐ろしさ。ある人の持つ偏見(ステレオタイプ)はみるみるうちに回りに広がっていくものです。すべてのことを一人で解決するのは無理かもしれませんが、自分の周りからだけでも、そういった偏見、また自分自身が持ちうる偏見を変えていくことができれば大きな意味を持つと思います。

梁 : 祖国に帰らなくても、自分の研究分野で一生懸命に成果を出せば、世界への貢献になると思います。

目のあたりにすることができました。自分がもらった援助は一生忘れることはないと思う。この恩返しは、勉強に励むことで、日本と中国のコミュニケーションに役立つ活動に積極的に参加することで実現したいと思っています。

関 : ロータリアンの奨学生になることで、例会に参加することによって始めて社会奉仕という活動を目のあたりにすることができました。自分がもらった援助は一生忘れることはないと思う。この恩返しは、勉強に励むことで、日本と中国のコミュニケーションに役立つ活動に積極的に参加することで実現したいと思っています。

朱 : 障害者たちへの支援活動だったり、国際支援の



活動をしたり、いろいろなボランティア活動に精一杯力を入れる皆さんの姿を見ているうちに、私は心から、尊敬しています。そして、自分の心の中にも、国際奉仕をしていることをよく理解しています。我々の留学生たちは国と国の架け橋として、国際貢献に何かできれば幸いです。

ビクトリア: 国際貢献をしたいと考えていますが、残念ながら現状ではどうしてよいかわからないのです。このことこそ、私が日本で直面している一番の問題だと思っています。



神津地区委員長のあいさつ

大変意義のある企画に参加させていただきありがとうございます。

国際的な紛争があまりに多い今日、国際ロータリーの綱領にもありますように国際平和のために活躍することや、国際的な理解を広めることが大事だと思います。その一環として、米山奨学会について皆様のご厚意をお願いします。

秋葉賢委員長のまとめ

第1回の「留学生の集い」の参加の皆様、ありがとうございました。次回は、テーブルを囲んでより密な交流ができればなと思っています。当RCも、社会貢献・国際貢献を皆様と一緒に活動していきたい思いますので、ご協力をお願いします。